

假名垣魯文作
蕙齋芳幾画

七編

西洋道中膝栗毛

繪本
28
四

東京書肆

萬笈閣



西洋道中膝栗毛七編序
我皇國文字假名垣魯文
難波津留し寺友と名を初乃
山跡登りし何人ぬ香焚の法
戯作は乃と深く好まざるを
手と上手とを方々々々ね去年の秋

西洋道中

31748

書肆しよせいを西洋道中せいやうどうちゆうに
 以もつる稗史はいしを綴つづるに遠とほく万里ばんり
 の情景けいけい窺うかがふに便宜べんぎん那なる洋典やうてん和譯わやく
 を引用しやうようするに當あたるを隔へるに
 堪たゆる心地こころせむは筆ふでを下くだすに
 其風そのふうの大小たうせうより月つき空あそより
 僕わが前のまへの

季き法朗ほうらう西せい南なんの博覽會はくわんかいに
 皇海かうかい路ろ印度いんど左さ平へいの沼ぬまを過あるに
 此港このみなとより一見いちけんふ大東たいとう東とう
 京けいより上かみの際まぎ魯文ろぶん兄あにを訪たづねるに
 物橋ものばしは一日いちにちをくしに在街ざいがいより夜よを
 語かたるに世よをくしに別わかるに人ひと趣向しゆかうの終はつ

光前りのぬるあまの最まのしを夫
の周みま序せよ空乞ひま曲まを
し記まよぬん好いふを能虫文字の
横灣人蓋のふら屋のふらし

明治四の
辛未夏より久

砂燕



東海の故国を放きて航海の船路も趣向
定飛脚の幸便ハ世界第一弥次馬の膝栗毛

萬國 航海 西洋道中膝栗毛 七編

西洋の各國を巡りて鐵道の蒸車も乗組
博覽會の僥倖ハ文明開化北八駿の滑替者

西洋道中膝栗毛

假名遣 訛語雜字俗用集

萬國航海 西洋膝栗毛七編換叙

の 一世代越後遺趣一盃一枚委細犬糞

縁喜 豌豆 呂律 論外 盤臺 初盤

張替 礫野郎 洋死洋生 煮燒返 三個四

洞 細 法外 法印 灰吹 這入 篋棒

と 何奴 土左門 洋銀 土臺 燈心 珍室

縮丸 畜生 慮外 理解 留飲 不飲不食

盗人 己 阿乳母 御前 教脊伏 狼 私

可笑 壯年時 乞丐 風邪 無構 よ 醉 寄合

夜一夜 魂 大願成就 澤山 太閣 來年頼

光 物体 左様為 附合 穿倒 宥 内乱

西洋標記

四

内證ナイシヤウ内陣ナイチンな生醉ナマエヒ難題ナガイ何分ナニブン乱離ランリ奥廢ウキハク

無的ムテキ法ホウ無間ムキョウ滅法界メツポフカイ自惚ジボク已等イトウ住味ジュミ

疑ウタガハシ右ミダヒ大將ダイシャウ雲天ウンテン萬里マンリ無誕ムタン喜祝キシユクののねく

黑坊クワク暗臭アンクウ合惡カクアク病ヤマイ厄介ヤクケ野菜物ヤサイモノま真ママ

益間ヒルマ真暗閣マクラン万歳マンザイ未真直マシナジ歸蛙ケルカエル外聞ガイブン

返カヘス藝者ゲイシャ閑山ケンサン會所カイショ買物カイモノ太踏縛タイダクバク打敵ウチテキ

不器用ボクキヨウ持御安泰ヒツミョウアンタイ息イキ天狗テンク天竺テンシク

天災テンサイ行燈アンドウ早朝アサツチ餅甘モチアメ散賤サンゼン三界山サンケイサン

内氣違ウチキチガヒ昨日キノウ彼奴カヤツ兄弟ケイテイ氣障キサハリ湯屋ユヤ

夕辺ユフヘ云イハ毎マ日ニチ毒度ドクタク參マシ面例オモて鼻ハナ無面目ムオモテ目出度メデタク

滅法界メツポフカイ蝸牛カウ皆みな化粧シヨウマイ無見度ムケンタク微塵ミジン骨灰コツカイ

芝居シヤイ商賣シヤウバイ脊負込セライコミ音信不通オンシントウ百ヒヤク



半生不與人間

事不墮留候計

初中 雄山堂主人



西洋道中 藤栗毛七編上

東京

假名垣魯文戲著

地球自ら轉りて一周せれば昼夜を逆じ右陽を繞ること一周すして一年とある説の事らうふと有りてより人の心は妙にみくえ目から太陽の光を算へ病れが起るの活汁を養ふ事をもて心を用ひ利を得るの光陰の失よりも疾き病化の心を彼花御船より夢遊する悟院舎の

日本人等の熱意の勢烈しきには千里の船
 跡百里のあはし僅に十日に九日目をくぐり海上
 無事小笠原海の大洋をうちまはれり紅海の入
 りある「アデン」とりくる地は若くは地も英吉利の
 領分なり時候の春陽あどより鬱々く去地柄
 至くよほしからば草木少く人の數一萬人余
 高貴も繁昌せむ唯飛御船あどく石炭を積
 む心用事をあそむたぬのとなればは辺を後海する

船「セイロン」を出帆してより卯ふるべき港を
 きりぬけしむもあふ船を下し流らざるのほし
 とらり

右の西洋旅客案内の書中より抄出せしむ
 彼風土の際略を誌せり然る小笠原の新
 刺輿地誌畧を披読たる小亞細亞洲の
 部亞拉比亞の條下よ云○亞丁の北方を
 紅海の入口小笠原三十一年前より英國小

属一歐洲より東洋へ往來する飛脚船
 の碇泊場はよく紅梅咽喉の地あり故に
 漸く繁盛し近來ハ吾人は日英の如く
 云々惟ふ小株案内の競と人口の異同あり
 こと彼虫の著者福澤氏の歐羅巴小紀
 海せられハ文之二代年にして今より以前
 十歳の星霜を經つり當て響地誌略ハ
 今の新聞を交へる當年の新書にして

各國國化日進むの時勢新入種蓋
 強昨日小あるドゥラざるを知るべし僕
 當地の情事を知るふあはびくこの一
 小紀略一が兎然の小冊故に事實
 考括せんも所謂極の下のちから持考し
 て切あしとあのみめのつらま書の中庸
 多く能加減よごめくまろ左の如し

ねも大後生の廣きの一輝ハ船をとりて亞丁の

地ある旅者より多く休息のあひざる船の途
旅者八音の合口の通次郎と三人よれば文書の
智恵神と地理書を便りとし英人ヨテルの
案内ふひつるは獲たふめびぎに旅者紙たちので
夏波知といふ島あづから港に小艇松の吉國軍
艦を御船高ひ船をうちあづめ又入船の速速
を見たりし

船足のをくれし漸と急込ち

紅海よりまたぬ入港

紅海は紅海といふは八音といふは

航海のしるしよかたに船足も

利よしとる世の音書性来

通次郎入港の祝炮をきき蒸氣船の網船く
滅するを腕めく一首の粗侍を吟む

泊亞丁洋

做頼山陽先生天草詩作

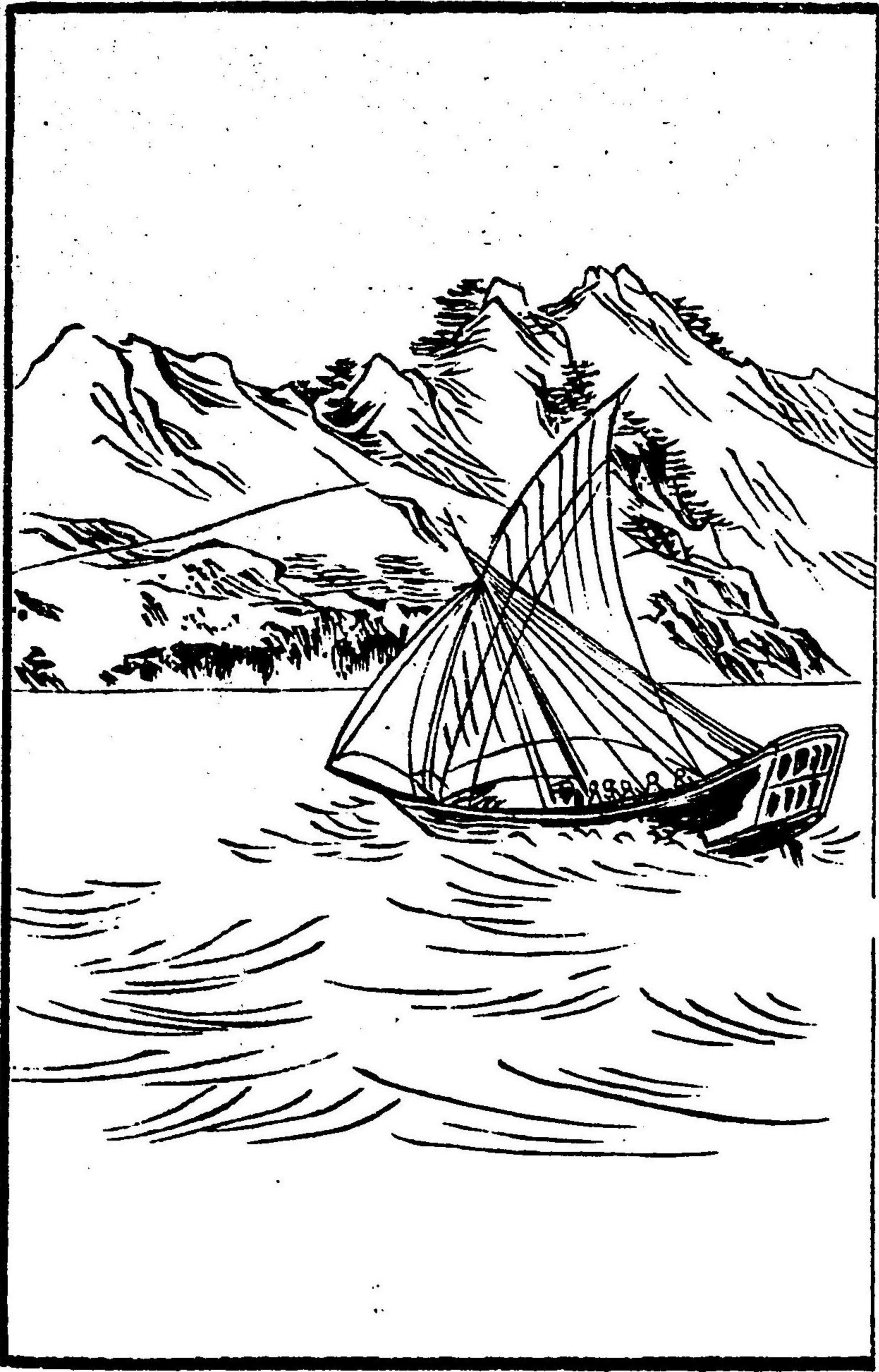
蜘蛛蜂耶巢耶網

仰天砲發声一喝

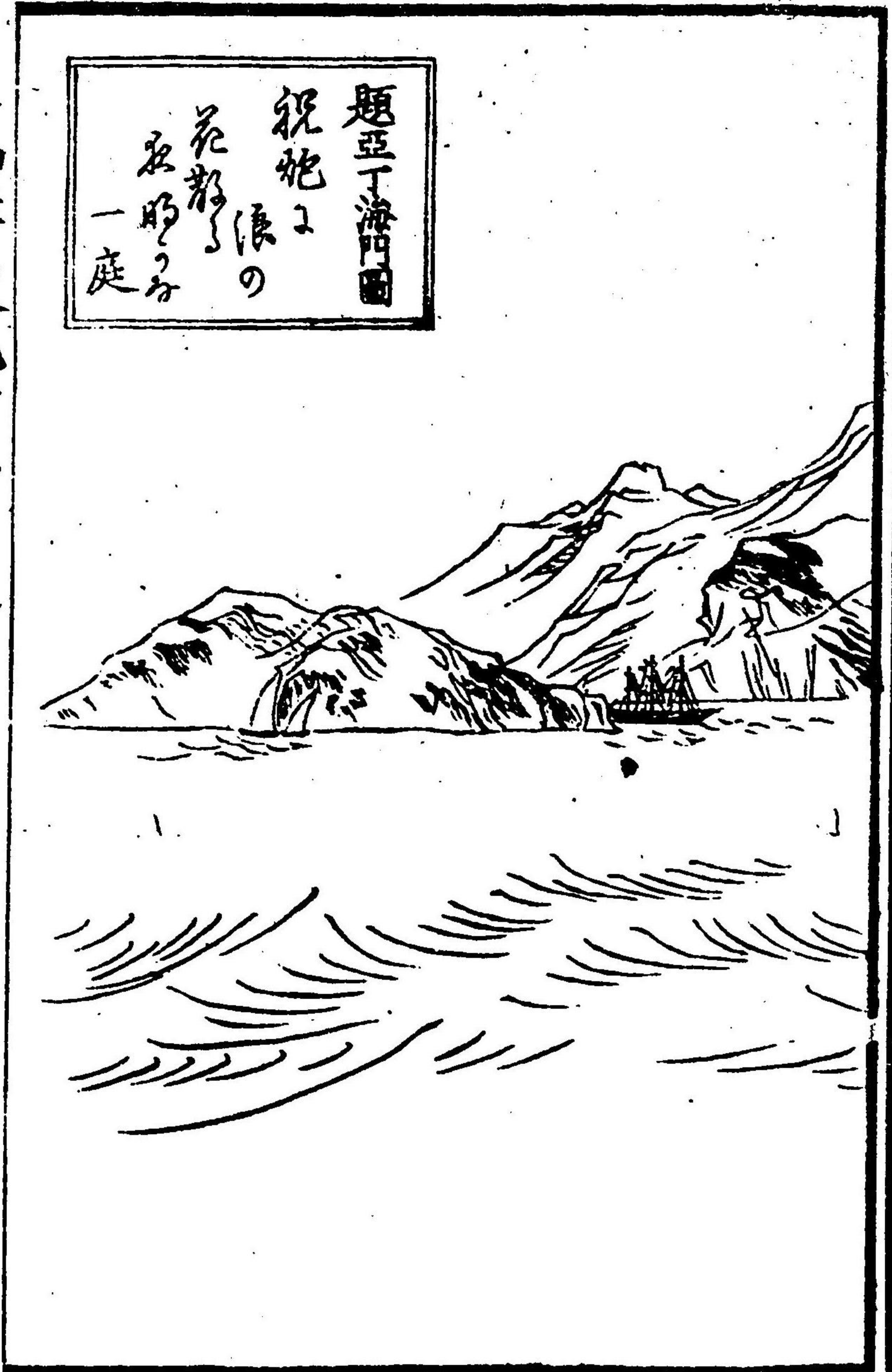
蠻夷泊船亞丁洋 烟横帆頭火漸滅
蛮夷 ばんい 泊船 とうふくせん 亞丁洋 ありんけんせいしんのうみ
 遠見水夫橋間登 外客渡海沖似浮
遠見 とうけん 水夫 しみずのうし 橋間 ばしまのうし 登 ぼる 外客 がいきゃく 渡海 とうかい 沖 うち 似 におも 浮 ぶ

北通さんあめん月の落からまあるまの唐人の森
北通 きたつう さん あめん 月 づき 落 落ち 唐 とう 人 ひと 森 もり
 ごとを夜夜をきくやうげせゆこのことごとく
ごと ごとを 夜夜 よよを きく やうげ せゆ このことごとく
 さうさうのさうさうあめんくら威るあもあまのうが後
さうさうのさうさう あめんくら 威る あもあまのうが 後
 日通バアあめんのかうをを学文育あやアころる
日通 じつつう バア あめんのかうをを 学文育 あやアころる
 めんが後考が味さやア感むるふ何まうあるのサ
めんが 後考 が味 さやア 感むる ふ何 まうある のサ
 北あんののの考りがゆいたとろく 協ごの協だ
北あんののの 考りがゆいた とろく 協ごの協だ

のと雲づいしの附舎あんボアあんまりかん
のと 雲づいし の 附舎 あんボア あんまりかん
 ぶるものもあるめんあらッチヤアそんみさうら
ぶるものもある めんあらッチヤア そんみさうら
 めんととらさらんをアで森徳先生大座の裏
めんととらさらんをアで 森徳先生 大座の裏
 佐者座の飯盛えの壺河保智恵の内子ゆ
佐者座の飯盛えの壺 河保智恵の内子ゆ
 どとらよ天形ぶりの各人達を去礎はして影
どとらよ天形ぶりの各人達を 去礎はして影
 粗考をぐらさるまらには調が控くッくたきふ
粗考をぐらさるまらには 調が控くッくたきふ
 ども口ッく面白がらまる知が妙考やア後入
ども口ッく面白がらまる 知が妙考やア後入
 通アアあめんひつりつるまも考ろからうが備
通アアあめんひつりつるまも 考ろからうが備



題亞丁海圖
祝施の
花船の
名所の
一庭



めんぞがきりやアこれやでの程がくをま
 ろいとやッたのて一ツもね入ヨ北「そのやその及
 送入移入者やアまの者ろくろ移入のサ通「
 侍人「たのきむるを執るとあるまじう子北「
 それま「ちんぶんかんダ通「ちんぶんかんをろ
 あまぼろツ北「十三日合「者やれあらけ家の
 ぼよのダ通「者やれあらげられあびくべ北「
 あびく「まののんまのの通「のらまふあめし

があめりの「北「ア「あめ入の「とんあか
 とらふの「美魯や望美名者やア毎日だ世通「
 よ「他の「「難非をら「かあ人の結者やれの
 拙「北「結者やれの拙「ねらる通「人情「
 者やれ「けろ「あきれら「ト「あめ入の「合
 く「あめ入の「あめ入の「あめ入の「あめ入の「
 の「あめ入の「あめ入の「あめ入の「あめ入の「
 と「モ「北八と通「
 備「あめ入の「あめ入の「あめ入の「あめ入の「

由緒果地

三三



モテル



弥二郎

題街賣女色
 煩惱のたゞ
 ひろれてよしの花
 魯文

913.6
2
13

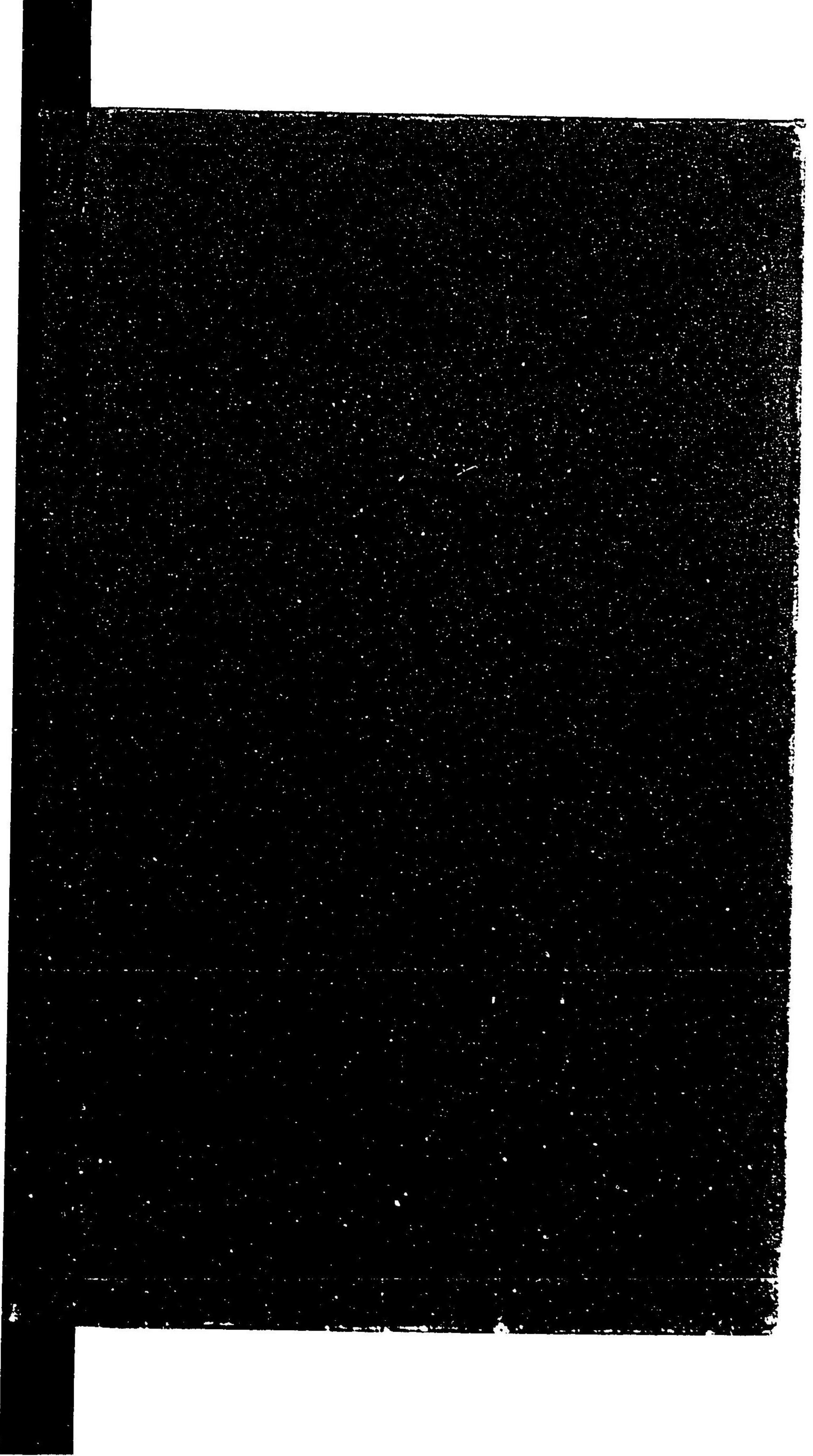
913.6-2

西洋道中

十九

過^{つち}らりもホテルのおとふつきの夜や
意^{こゝろ}のやま^ちかぬる^まの^{こゝろ}
那^な書^かつけくホテルとちつ^まだ^ら足^あを^あ
こそ帰^かり^たれ

西洋道中膝栗毛七編上



*913.6
2
13